

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（文学）	氏名	宮岡 昌宣
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 陶棺に関する考古学的研究			
論文審査担当者			
主査	教授	古瀬	清秀
審査委員	教授	岡橋	秀典
審査委員	教授	西別府	元日
審査委員	准教授	竹広	文明
審査委員	准教授	野島	永
審査委員	立命館大学名誉教授	和田	晴吾
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、古墳時代後期から飛鳥時代（6世紀中葉～7世紀後半代）にかけて主に西日本において盛行した特異な棺形式、陶棺について、型式分類と共伴土器などをもとに変遷過程を明らかにし、それに関わる集団の動向や当該時期の政治的、社会的諸関係など様々な視点から、陶棺の歴史的意義を検討したものであり、全8章からなる。</p> <p>第1章「陶棺研究の進展と課題」では、陶棺に関する研究史を総括して、課題の所在を明らかにする。</p> <p>第2章「分類の基準—分析の視点—」では、全国700余例にのぼる陶棺について、その半数に近い307例を実際に考古学的な視点で観察し、分類の基準16項目を定めるとともに、墳形、副葬品などの要素を加えた基礎データを集成した。</p> <p>第3章「タイプ分類」では、先の16項目の組み合わせから、全国陶棺を24タイプに分類し、それぞれの特徴と属性を明確にした。</p> <p>第4章「タイプ変化と段階設定」では、これら24タイプの陶棺が時空間的に展開、変遷するのに、どのような段階を経ているのかについて検討した。その結果、4つの段階を経て展開することを指摘している。</p> <p>第5章「段階別タイプ分布の様相」では、24タイプの陶棺が4つの段階ごとに各地域でどのような展開を示すのかについて検討した。陶棺は畿内系と吉備系の2つの系統で展開することがわかっているが、ここではそれぞれの系統に属するタイプが4つの段階ごとに示す様相を明らかにした。</p> <p>第6章「陶棺の展開とその意義」では陶棺の歴史的意義について、地域ごとに検討した。畿内では土師質亀甲形陶棺と土師氏、須恵質四注式家形陶棺では須恵器製作集団との結びつきを、また一方の吉備では多様な背景が窺え、鉄生産に関わる有力在地勢力、製鉄・窯業など手工業に直接携わる工人集団との関連を想定した。さらに、畿内及び吉備以外の陶棺については、約80%が畿内系であり、吉備系は20%にすぎないことを指摘し、しかもそれらの90%以上が須恵質であることから、須恵器生産などの熱産業を担う人たちであった可能性を述べる。</p> <p>第7章「陶棺の起源」では陶棺の起源について論及し、4世紀後葉から5世紀末にかけて、埴輪と同質の技術で作られた、棺専用の特製埴輪棺にその祖形が求められると推測した。この特製埴輪棺と土師質亀甲形陶棺出現の間には約半世紀の時間差が存在するが、いずれも土師氏との関わりを有することから、陶棺が土師氏の盛衰の中で6世紀中葉になって再び、かつての職掌と伝統を表徴する棺形式として生み出されたと指摘する。</p>			

第8章「棺形態に見られる階層差と集団差—陶棺・木棺・石棺の比較を中心に—」では、陶棺の示す階層的な位置づけを確認するために、他の棺形式である石棺や木棺について、墳形、墳長、石室規模、副葬品などの項目で比較分析した。その結果、石棺、木棺、陶棺という縦方向の組列が確認でき、棺形式による被葬者の階層差の存在を指摘した。しかし、これが単にヤマト王権との政治的関係や縦方向の身分秩序を示す階層差だけを表徴するのではなく、出自や職能に関連する集団差といった要因も存在することを指摘する。

以上のように本論は、これまで個別的な検討が主であった陶棺について、広域にわたる資料の緻密な実地観察によってその形態的特徴、時間的変遷過程、地域的分布等の検討による体系化を図るとともに、被葬者層の階層的な位置づけと職掌についてまで、ほぼその全容を解明するに至ったものであり、その成果はきわめて高く評価でき、博士の学位を取得するに十分値するものである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。